

「失われた息子」

(ルカによる福音書 15:11-32)

「放蕩息子」のたとえは、直前の「失われた羊のたとえ」「失われた銀貨のたとえ」と合わせて「失われた」三部作のひとつと言われます。「放蕩息子」というタイトルで親しまれていますが、「失われた息子」という方が良いかもしれません。「放蕩息子」と聞くと、息子の罪が「放蕩」にあったと考えがちです。わたしたちは、法律のような絶対的な「規範」「基準」から外れた人間を罪人と考えるからです。この視点で見ると、「兄」はたしかに罪人ではありません。しかし、兄は父の指示、つまり「規範」は守ってはいても、心はどうだったでしょうか。弟に嫉妬する様子からは、彼が我慢しながら父のもとにとどまっていたことが分かります。兄もまた、父との積極的な交わりに生きていなかったのです。聖書の罪は、神との交わり、関係から離れることです。規範からそれず、立派な行いをしていても、神と人との愛の交わりに根ざしていなければ意味がありません。嫉妬する兄の気持ちは痛いほど分かります。しかし、兄もまた、父との交わりに生きていなかったという点では、弟と同じように悔い改めが必要なのです。

さて、今日の旧約聖書では、神がかつて海を割いたように、ヨルダン川を乾かせ、民を渡らせたことが記されています。そこには、ダイナミックな神の姿があります。それとは対照的に、「失われた」三部作では、たったひとつの小さな命を大切する神の姿が記されています。海を割る力を持つ神は、迷いでてしまったたった一匹の羊を探しだす神でもあるのです。

父は、失われていた次男の姿を遠くに見つけるや否や駆け寄ります。そして、抱きしめ、「雇い人の一人にしてください」という次男の謝罪の言葉すら最後まで言わせぬうちに、最上の服と指輪とサンダルを用意させ、宴会を開きます。なんと寛容な父でしょうか。赦された次男は、心底救われたことでしょう。これがわたしたちの神です。神はたった一人の命が失われることも望まない。それどころか、宴会を開くほどに、失われた命の回復を喜ばれます。

失われていた息子が戻った時に駆け寄って迎えた父は、ふてくされる兄をも諭します。その神は、わたしたち一人一人のことをも、待っておられます。この父なる神との交わりにおいてこそ、真の愛、尽きぬ糧があります。